

牟礼村袖之山の舟石が教えてくれるもの

富樫 均*・小山丈夫**

牟礼村袖之山の舟石は、第四紀成層火山の活動に由来する巨石である。舟石には、石の由来に関する地質学的な特徴のほかに、かつての氷河論争に関わる科学史的な話題、さらには石にまつわる不思議や民間伝承などの歴史・民俗学的な特徴も見出される。一個の石から様々な意味を読み取ることができる舟石の事例は、身近な対象が地域の自然や文化の再発見の糸口になるという好例である。舟石の価値評価には個別の興味や関心とは別に「対象をまるごと理解する視点」が必要である。そのような視点に、舟石という一文化財の見方にとどまらない新しい意味を考察した。

キーワード：舟石、天然記念物、地域理解、価値再発見、教材

はじめに

近年さまざまな場所で、地域固有の自然や文化の再発見に関わる取り組みが行われている。具体的にはある事物の価値の記憶を掘り起こしたり、あるいは新しい価値を見つけたりすることがなされる。しかし、対象のもつ価値を合理的に評価することは必ずしも容易ではない。たとえば、審議会などの答申をへて文化財に指定された事物であっても、価値評価の基準が明瞭なものもあれば、必ずしも明瞭ではないものもある。しかし、対象が特定の自然物である場合には、評価の合理性がその後の保護（保全）策の根拠として意味をもつことにもなるため、価値評価はなるべくわかりやすく明快であることが望ましい。長野県上水内郡牟礼村では、2003年1月に袖之山の舟石という巨石が村の天然記念物に指定された。指定にあたっては、牟礼村文化財調査委員会、その価値をめぐる慎重な議論が交わされた。ここではこの石の見どころを整理するとともに、地域の人たちが今後どのように舟石を活用することができるかを含めて、自由な発想で舟石の価値の評価を試みた。また、舟石を具体的な事例として、地域の宝を再発見することの意味を考察した。舟石の見どころの整理には、地質学や歴史学あるいは民俗学に関わる個別の知見を活用した。一方、対象のもつ価値の評価では、特定の専門分野にとらわれず、新たな視点で対象をとらえることを試みた（注1）。

舟石の位置と形態的な特徴

舟石の位置を図1に、その形状を、図2、図3に示す。舟石は、牟礼村袖之山地区の公民館の北方にのびる、丘陵状のなだらかな尾根筋わきの標高約660mの地点に位置する。北東向き斜面の上部に単独に露出し、地上部は舟の舳先にも似たややいびつな形状をもつ。下部が埋まっているため全体の形状は不明であるが、上面の長径9.6m、短径5.3m、高さ4.3m（地上部分）という大きさで、地上部の長軸はN71°W（真北から反時計回り71°の方向）を向く。岩質は径5mm大（最大10mm程度）の黒緑色の輝石の斑晶と、径1～2mmの斜長石の斑晶が目立つ灰色の輝石安山岩である。石の重さは、約500～600トン以上と推定される。明瞭ではないが比較的緻密な部分とやや多孔質で粗しょうな部分があり、それらが帯状に分布する。一部に弱く自破碎し、礫状化した部分がある。舟石の上面には、N66°W方向で開口幅10cm、長さ3mほどの割れ溝が高角度の傾き（60°～70°S傾斜）をもって発達し、溝の中には水が湛えられている（図3）。

上半部の雨のあたる部分を観察すると、表面を伝い流れる雨水の経路に沿って、下流側になるほど雨水によって溶食された跡が深くなってゆく様子が観察される。このことから、現在の姿勢のまま、非常に長い時間をかけた風化・侵食作用を受けていることがわかる。

* 長野県自然保護研究所 〒381-0075 長野市北郷2054-120

** むれ歴史ふれあい館 〒389-1211 上水内郡牟礼村牟礼1188-1

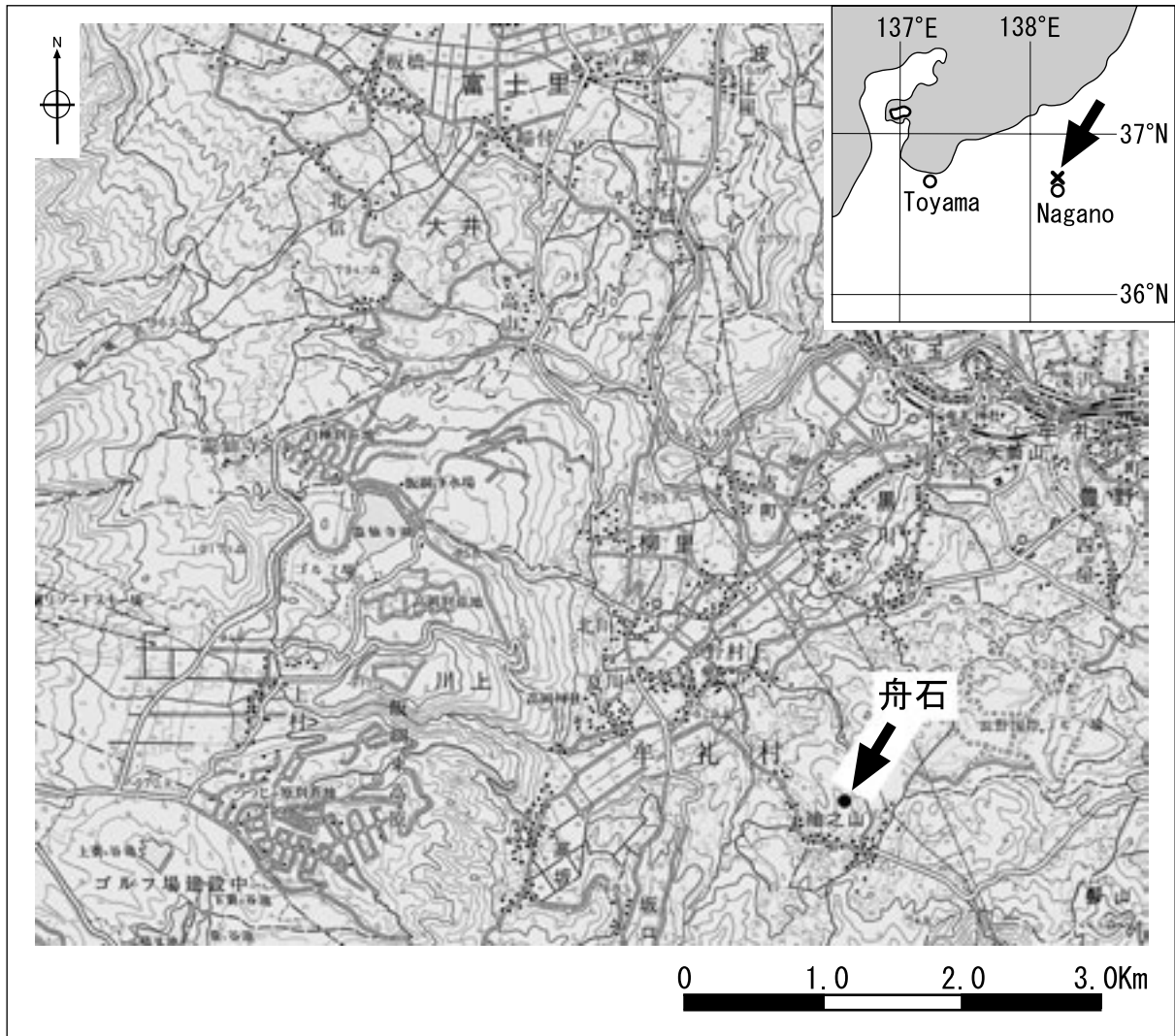


図1 舟石の位置図

(国土地理院発行5万分の1地形図「戸隠」を使用した)



図2 舟石の全景写真

(左上方にあるのは見学用の足場)



図3 舟石上面の割れ溝

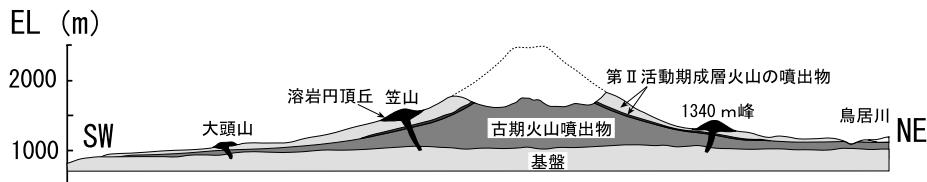
(白いスケールは長さ1m)

舟石はどこからやって来たか？

巨石を運搬する作用として、一般的には水流（土石流）、山くずれなど重力による移動（マスマーブメント）、火山噴火、氷河、人為などが想定される。これらのうち、水流については、舟石が尾根部に位置することや、近くに土石流を起こすような河川や河成堆積物が分布しないことからその可能性はない。また後述するようにかつて氷河作用が注目されたことがあったが、現在は氷河による舟石や舟石周辺の岩塊の運搬説は否定されている。

舟石は飯綱火山東方約8 kmの地点に位置し、火山灰質の砂混じり粘性土を基質とする不淘汰の礫混じ

り堆積土層に含まれる角礫で、周辺には規模は小さいものの類似の岩塊が散在する。図4は早津(1985)、早津ほか(1994)をもとに、飯綱火山の活動史をまとめたものである。飯綱火山の歴史は大きく第I活動期、第I休止期、第II活動期、第II休止期に分けられ、現在は第II休止期に含まれる。岩相により、舟石は飯綱火山を構成する溶岩の一部とみられるが、溶岩流が現在の地点まで流下してきたものではない。袖之山地域を含む飯綱火山東方の鳥居川流域には、大規模な岩屑なだれによる堆積物（牟礼岩屑流）が分布する（早津 1985）。岩屑なだれは、火山の水蒸気爆発や地震などによって火山体の一部がなだれのように速い速度で山麓に向かって崩れ落ちるもので、火山活動の一部に含められる現象である。現在の飯



時代 (万年前)	活動期	火山体	岩質*	山麓域
現在 5~6	← 小活動あり(?) 第II休止期		-	↑ 火山麓扇状地 堆積物
15	第II活動期 溶岩円頂丘形成 カルデラ 成層火山	怪無山・高デッキ 天狗岳・中ノ峰 1340 m峰・笠山 富士見山・大頭山 水蒸気爆発(?) 飯綱山溶岩層	D A (P・H) - A(H) A(P) B	
20	第I休止期		-	(火山麓扇状地 堆積物?)
34	第I活動期	古期火山岩類 (古飯綱火山)	- B A (P・H)	牟礼岩屑なだれ

* 岩質：B（玄武岩）、A（安山岩）、D（石英安山岩）、P（輝石）、H（角閃石）

図4 飯綱火山の活動史

(早津1985, 早津ほか1994をもとに編集)

縄山（飯綱山，山頂標高1917m）～霊仙寺山に連なる外輪山をつくる溶岩の噴出は，第Ⅱ活動期のもので，牟礼岩屑なだれはそれよりも古い第Ⅰ活動期の堆積物に相当し，形成年代は数十万年前にもさかのぼると考えられる（早津 1985）。以上から，舟石は現在みられる飯縄山の山体よりも一世代前の古飯綱火山を構成していた溶岩の一部で，火山体が崩壊したときに，岩屑なだれによってはるばると現在地まで運ばれてきたものと考えられる。そして，その後周囲の土砂の流亡もあり，現在見るように尾根筋にぽつんと取り残されたものとみられる。

このような舟石の形状と，火山との距離，そして尾根筋にのこる産状などから，すでに姿をとどめていない古飯綱火山や，それ以来の長い自然の歴史，そして郷土の大地の生い立ちなどを窺い知ることができる。

舟石の水の不思議とその成因

舟石の割れ溝（図3）には水が湛えられており，地元では，早ばつのときでもこの水は涸れることがないといわれている。この水の給源と涸れない理由について，若干の考察をしておく。

舟石の形状を観察すると，上部の平坦面の発達と割れ溝の位置と姿勢が注目される。第一に上部の平坦面をぬらした降水（雨露など）がうまく溝に集まってくる形状になっている。第二に，溝の内部が急角度で斜め下方に奥深く続いているのにたいし，溝の入口が狭く，しかも一部は庇のように張り出している。したがって，風や光が直接溝の内部に入りにくく，蒸発が抑えられる構造になっている。つまり，石の姿勢と溝の形状の組み合わせが，広範囲の水を集め，しかもいったん集めた水は外に逃がさないというしくみをつくっていることがわかる。また，舟石を取り囲むスギやカラマツの林の存在も，乾燥を抑えるのに役立っていると思われる。

舟石側面の弱く自破碎をともなう多孔質の部分は，おそらく溶岩層の下底（もしくは上面）にあたる。それにより，もとの溶岩流を想定すると，水を湛える溝の方向は，溶岩流の流理方向に調和することがわかる。したがって，おそらくは初生的に板状の節理に近い性格をもつ亀裂が存在し，その亀裂がその後の溶食をともなう風化・侵食によって溝にまで拡大したものであろう。つまり，「溶岩が冷却するときの初生的な亀裂」と，時間をかけて進行した「選択

的な風化・侵食作用」の2つが組み合わさり，溝の基本構造ができていると考えられる。ところで，一般に溶岩流が地表面を這って流れる場合，板状の節理は地表面に平行に発達しやすい。したがって，そのままでは水を溜めることはむずかしいはずである。しかし舟石の場合は，いったん固結した溶岩が割れて岩塊となり，それが岩屑なだれとして再移動したため，途中で回転が加わり，最終的に水を溜めやすい現在の姿勢（溝の傾斜）を得たものと思われる。つまり舟石の割れ溝と涸れない水の存在には，少なくとも「溶岩の構造」と「火山噴火以後の回転」と「風化作用」の3つの出来事の重なりがあることになり，そこには絶妙な自然の仕組みを認めることができる。

なお，水の存在については，これまでも「丁度良く雨水の溜まるような状態になっている」という意見（宮沢 1978）や，「地中の水分を吸い上げているため」という見解の紹介（高野 1990）がある。いずれが正しいか決定的な証拠はそろっていないものの，水温や水位変化をみるかぎりでは，地下水の吸い上げ説よりも，雨水集水説の方が理解しやすいように思われる。

舟石に秘められた氷河論争

舟石には，わが国の地学史にまつわるもうひとつの顔がある。舟石と氷河説との関わりについては，すでに信濃毎日新聞社編（1992），中沢（1997），矢野（2000）などに紹介されている。しかし，その関わりについて具体的に考証した資料がこれまでになかったので，ここでまとめておく。

岡山（1974）によれば，1880年（明治13年）に始まる日本の氷河研究には，その後2つの大きな論争期があったとされる。第1論争期は1910年～1920年頃にあたり，北アルプスなどの標高の高い山岳地に残る氷河地形が注目されるとともに，当時梓川沿いにあった巨石（通称ヘットナー石）が氷河によってもたらされたものか否かについて激しい議論が繰り広げられたというものであった。つづく第2論争期というのは1931年～1936年頃のものであり，国内における低位置氷河説（注2）をめぐる大論争であった。

舟石は，この低位置氷河説に深い関わりをもっている。第2論争期の嚆矢となったのは，小川琢治（1931，1932～1933）の一連の論文である。まず

1931年11月に発表された「中央日本の洪積世氷河作用について」という論文では、北アルプスと南アルプスの東麓における氷河堆積物と氷河地形に関する発表がなされた。つづく1932年～1933年にかけて小川は「中央日本氷成堆積物の分布 (一)～(四)」をたてつづけに発表した。ここにおいて、甲信地域一帯に範囲を拡大して低位置氷河説が論じられ、それがその後の中部地方・東北地方の氷河遺物をめぐる国内の大論争につながることになる。

牟礼村 (当時高岡村) 袖之山地区の巨石に関する記載は、上記の1932年にはじまる論文 (一) の最初に登場する (図5参照)。小川 (1932) は「舟石」や、舟石の近くにあるもうひとつの巨石「馬鋏石 (まんがいし)」などの名称を具体的に述べているわけではない。しかし飯綱・黒姫火山地区における氷河作用の証拠をのべる中で、「袖之山地区に大岩塊の散在が著しく多い」こと、また「その岩塊の中に極めて明瞭なる擦痕を発見した」ことを写真で示しているのである (ただし写真に示された石は「舟石」や「馬鋏石」ではなく、残念ながら現在特定することができない)。したがって、「舟石」ひとつが証拠にされたということではないものの、ゆるやかな起伏に特徴づけられる牟礼村周辺の地形と、袖之山周辺

に存在する多くの大岩塊、そして岩の表面に残る傷跡や岩の産状とを合わせて、小川は低位置氷河説の証拠としたのであった。もちろん、周辺に類を見ないその大きさや、尾根上に残る産状から、舟石がこれらの岩塊群を代表する石のひとつとされたことは確実であろう。

このように、日本アルプスから離れた地域で、低位置氷河説を裏付けるものとして、小川が最初に示した証拠は袖之山周辺の巨石群であった。つまり舟石は、わが国の地学史の1ページを記念する「低位置氷河論争」の幕開けを告げるという大きな役割をもったといえる。

現在、小川が提唱した「低位置氷河説」の内容は学問的には否定されている。舟石を含む袖之山の巨石の由来も、氷河によるものではなく、火山活動に伴う岩屑なだれによるものと考えられる。しかし、「低位置氷河論争」がその後のわが国の氷河地形研究の発展に果たした役割は大きく、科学史における小川の学問的功績は不朽のものなのである。たとえ過去の学説が今日支持されないものとなっても、一時代をつくった学説誕生の意義が消えるものではない。むしろ私たちは、舟石にまつわる氷河論争を通して、「科学の発展の歴史」や「科学上の真理とは

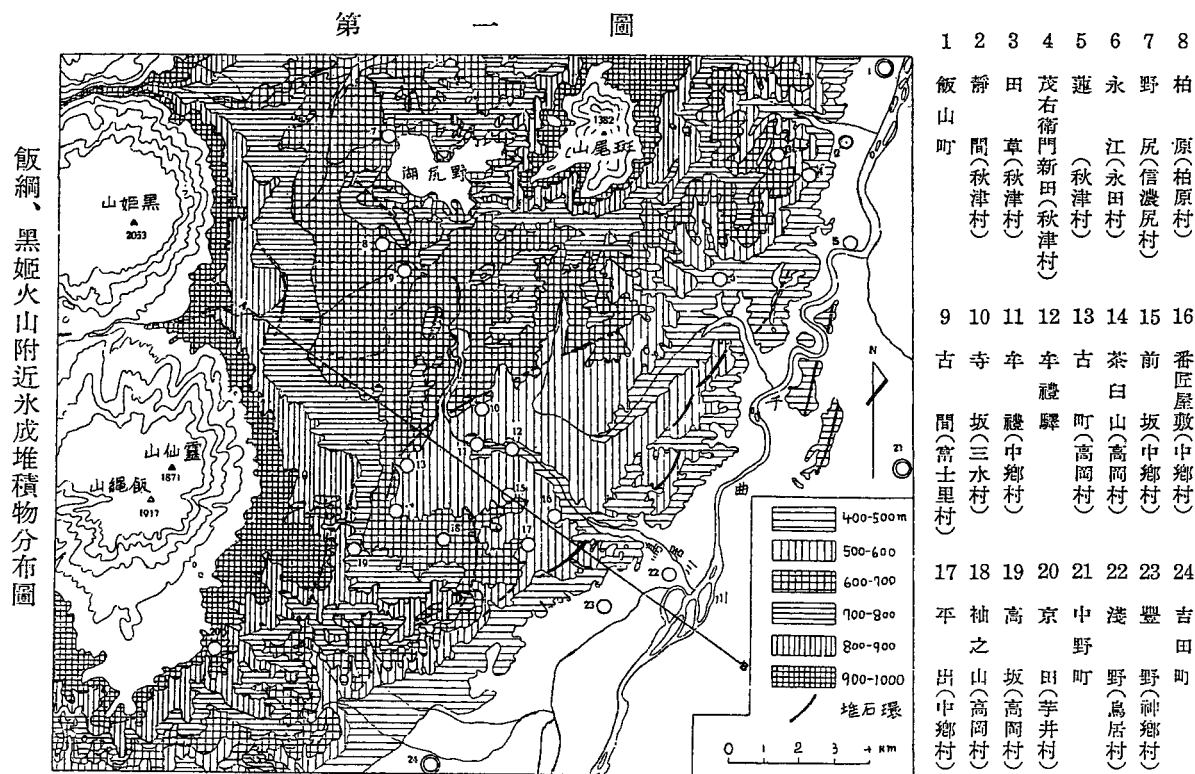


図5 飯綱、黒姫火山付近氷成堆積物分布図
(小川琢治1932の第一図)

何か」を学ぶことができるのではないだろうか。

舟石と人間とのかかわり

舟石のある袖之山集落は、16世紀末ころ、新たに開発されて立村した村落であるといわれている。

袖之山の史料に「舟石」の名があらわれる初見は、寛文7年(1667)作成「袖之山村御水帳」(現存は安政2年(1855)写本(高野秀夫氏所蔵))である。そこには畑耕地名として「舟石」「舟石尻」などの名所(などころ;小字(こあざ)の前身)が記載されている。この水帳は、当時の領主であった赤沼知行所佐久間四郎次郎盛遠が実施した領内検地の結果を記したもので、いわば袖之山村の土地台帳である。耕地山林が記載の対象であるので舟石そのものの記述はない。これ以前にも歴代の領主によって検地は行われたが、現存する検地帳はこの佐久間検地のものが最も古い。したがって、いつから「舟石」という名が存在したかについては、検地に際して命名されたという可能性も否定できないが、地名に先行してすでに石の命名があったと考えるのが妥当と思われる。

くだって、文久元年(1861)頃作成と推定される「袖之山村絵図(仮称)」(高野秀夫氏所蔵)には、村の全体像を描いた図中に、舟石の形状が的確に描写されている(図6)。なお、舟石のある地点に接し

ては、袖之山村北方に隣接する茶臼山村から、袖之山村南東の塩沢峠を降りて善光寺平の吉村へと通じる道路が描かれている。この道はかつて牟礼村西地区と善光寺平を結ぶ道路であり、古代の令制東山道支路に比定する説もある重要な幹線であった。袖之山村の人家は舟石のある尾根からやや離れて集落をなしているのも、昔も今も住民が日常的に石を目にすることはなかった。さりとして、深山に人知れずあるというわけではない。舟石は当時の道から20mほど見上げる指呼の間にあり、往来の人々は自然に巨石を目にしていたはずである。舟石は、袖之山や付近の住民にとって、地域のシンボリックな自然物として認知されていたことは確かであろう。

なお現在の舟石の所在地は、牟礼村大字袖之山540番1号であるが小字は舟石のままであり、地名にもその名が生きている。

舟石の民間伝承について、『高岡村のあゆみ』、『公民館報むれ』『分館報そでのやま』『むれむらの民話』などに掲載されたものを列挙すると、以下のようなものがあげられる。

- ・昔は石の名を「フネシ」と呼び習わしていた。
- ・石の上面にある割れ目に溜まる水は日照りでも乾くことがない。「神霊水」と呼んでいる。昔は石に注連縄をまいていた。
- ・割れ目の近くに獣のヒヅメのような痕がある。



図6 袖之山村絵図(高野秀夫氏所蔵)

これは昔、弘法大師が牛に乗ってこの石で休憩したその跡であるという。川中島合戦の折、上杉謙信が馬に乗って登った痕ともいう。

- ・割れ目に溜まる水には不思議な効能があり、眼病の者は目を洗うと治り、妊婦が飲むと安産になる。百日咳には特に良く効くという。
- ・昭和のはじめ頃までは、水の効能を信じて遠方から汲みにきた人もいて、割れ目に賽銭を投げ込んでいた。
- ・舟石は、流行病に苦しむ子供たちを見た飯縄山の女神が天から落とした陰石であるという(注3)。

なお、今回の村文化財指定を検討する過程においても、袖之山区の住民から下記のような体験を聞き取ることができた。

- ・昔から割れ目に溜まる水は目の病気に効くと聞いた。(複数者)
- ・割れ目の間に賽銭があげてあるのをよく見かけた。(複数者)
- ・子供のころ、里のほうから「舟石はどこか」とやってきた人があった。道案内をしたら小遣いをくれた。(60代男性)
- ・芋井(長野市)の人が、「咳が止まらないので舟石の水を飲むと効くと聞いた」といって訪ねてきたことがあった。自分も咳きこむと親に飲まされた。水がかなり減ったので井戸水をバケツで運んで注ぎ足したこともあった。(80代男性)
- ・子供のころ、首の後ろのほうに水疔ができたとき、祖母が舟石の水をつけてくれたら治った。(60代男性)
- ・馬で材木を運んでいたころは、舟石の脇の山道が幹線で、石のあたりは馬の良い遊び場だった。(70台男性)
- ・10年ほど前、眼が充血して具合が悪くなり、いくつも眼科にかかったがなかなか良くなかった。心配した祖母が舟石の水を眼につけてくれたら間もなく治った。人は迷信と言うかも知れないが、自分は舟石の水のおかげで治ったと信じている。(30代女性)

これらの体験の内容から、人々が舟石に関心をよせてきた主な理由として、「潤れない水」への信仰が大きな位置を占めていることがうかがえる。潤れない

い水の不思議が、病患を治癒してくれる神霊水という民間信仰を生んだことは想像に難くない。

かつて、このような石や水の伝説は各地方で枚挙にいとまがないほど存在していたものであり、とりたてて舟石にだけ特徴的なものではないだろう。しかしながら、袖之山の舟石には、現在もこうした伝承や記憶が住民の幅広い年齢層にわたって息づいているのである。袖之山住民の方々と接していると、先人が舟石に抱いていた畏敬の念を、そのまま受け継いでゆこうという気持ちを実感することができる。今回の文化財指定も、きっかけは区民からの提言であった。その背景にあるのは、歴史的に育まれた、袖之山区民の舟石を畏敬する心情そのものといえるのではないだろうか。

天然記念物になった舟石

先にふれたように、今回の舟石文化財指定の契機は、地元袖之山区からの声が直接のきっかけであった。2000年(平成12年)、舟石の脇を通過する袖之山バイパス道路の敷設があり、舟石は車中からも人目につきやすくなった。袖之山では、「舟石を世にだそう」という気運が高まり、村当局に対策を要請したのである。

こうした動きには、観光面の期待ももちろんあったのであるが、その発想の根底には、昭和初期の小川琢治博士による調査という名誉な出来事が、当地における地学への関心を高めたことが、少なからず影響していたと思われる。『高岡村のあゆみ』には、「小川琢治博士が菅笠に莫着という出立で単身調査に参られた。」とあり(注4)、このことを伝え聞いている高齢の方もあって、中央の高名な学者が注目した貴重な石であるから文化財に相応しいはずだとの声もあがっていた。2001年(平成14年)7月、袖之山区からの要望をうけた牟礼村では、関係部署による調整ののち、長野県自然保護研究所、戸隠村地質化石館に現地調査の協力を依頼した。その結果「地学的見地からだけでも村の指定文化財の価値はある」との見解を得た。これを受け、文化財指定の可能性について教育委員会にはかり、さらに2002年(平成14年)2月牟礼村文化財調査委員会へ諮問し見解を求めた。

しかし、指定までの道のりは決して簡単なものではなかった。牟礼村文化財調査委員会では、まず「牟礼村文化財保護に関する条例」の6つのカテゴ

リー（有形文化財・無形文化財・民俗資料・史跡・名勝・天然記念物）のどれにあてはまるかが議論になった。県内他町村の指定物件と比較してみても、同等な条件のものはあまり無かったことと、文化財調査委員の間でも「特殊な石質ではない舟石を指定する理由があるのか」という意見があり、その価値を評価するには慎重な検討を必要としたのである。

調査委員会ではまず、村内にある他の「名前をついた石」を調査し、あらためて舟石がとくに「村にとって重要で学術的価値の高いもの」であるかどうかが討議された。その結果、地学的な意義に加えて、歴史、民俗的な観点からの意義づけが必要であるとして、袖之山区内に残る古文書調査、講師を招いての研究会など、1年間にわたり検討を重ねた。その結果、2003年（平成15年）1月10日天然記念物として指定が相当との答申がまとめられた。その答申を受け、村教育委員会は同28日に舟石を牟礼村天然記念物として指定した。

指定の意義として挙げられた点を整理すると以下の4点に要約される。

- ①村内で最も大きな巨石である
- ②牟礼村の地質を知る教材として代表的なものである
- ③日本地学史における「低位置氷河説論争」の根拠資料となった学史上の価値
- ④歴史的、民俗的に袖之山地域のシンボルである

一見してわかるように、複合的な意義付けにより文化財としての価値を認めた内容になっている。ところで、文化財保護法による天然記念物の概念には、「人との関わりで育まれてきた自然物」という考え方があり、「わが国の記念物保護の大きな特徴は（中略）自然との共生のもとに育まれた日本文化を総合的に保護するしくみとなっていることです。このような、わが国が世界に誇るべきしくみを確実に受け継ぐとともに、より豊かなものへと充実させていかななくてはなりません。」（文化庁文化財保護部記念物課 1999）。このように天然記念物を極めて文化的な自然物と位置付け、その観点から活用をはかることが近年とみに盛んである。今回の牟礼村による舟石の文化財指定が、自然物の稀少性や珍奇性を価値基準とせず、むしろ地域の自然や歴史、あるいは文化・民俗などを学習するための教材としての可能性を指定根拠として大きく位置づけたのは、こうし

た理由によるのである。

文化財指定の後、舟石とその周辺は村有地化され、地元住民の協力のもとで、遊歩道や見学用ステップが整備され、案内看板も設置された。今後は印刷物への掲載などにより、舟石の存在は広く知られてゆくだらう。「文化財は学んではじめて価値が高まるもの」といわれている。舟石は、まさにその言葉があてはまる文化財といえるのではないだろうか。

舟石の価値を受け止める新たな視点

舟石のもつ様々な顔と、その見どころ（特徴）について述べてきた。人によって興味や関心は様々なので、興味に応じて思い思いに舟石を観ることは可能である。しかし、ある一面に注目するばかりでなく、多様な特徴をまるごと受け止めるような対象との付き合い方があってもよい。むしろその方が、対象のもつ意味を深く理解することにつながる場合がある。

ところで、身の回りに存在するものは、たとえばんなものであれ、すべてが固有の価値をもつ。その固有の価値をはかる物差しになるのは、対象がもつ「個性」と「歴史性」である（富樫 2001）。舟石の見どころを整理すると、図7のようになる。この図は、単に見どころを書き出したものでなく、舟石の「個性」と「歴史性」から、たくさんの事象との関係と関係の広がり表現したものである。実は、舟石のもつ最大の魅力というのは、個々の特徴そのものよりも、むしろ1個の石の存在を通して、日常経験できる時空の範囲をはるかに超えた広く豊かな世界を、私たちが感受できるという点にある。つまり、舟石の舟石らしさは、多くの事象との関係や関係の網目の広がりなかにこそあると考える。この認識に照らせば、舟石こそは特別な存在であることが納得され、まぎれもない地域の宝といえることになる。

個別の属性によらず、「他の事象との関係や関係の広がり」をとらえることは、舟石という一文化財の見方にとどまらない新しい意味をもつと考える。なぜなら、図7のような視点により価値が発見される事象ならば、それは地域を知るための教材として大きな発展性をもつと考えられるからである。たとえば舟石を例にとってみよう。この石をきっかけに、太古の自然現象から、生きている地球や、あるいは水を湛える不思議な仕組み、病気の治癒を願う気持ちや、かつての村の暮らしなどなど、大人も子ども

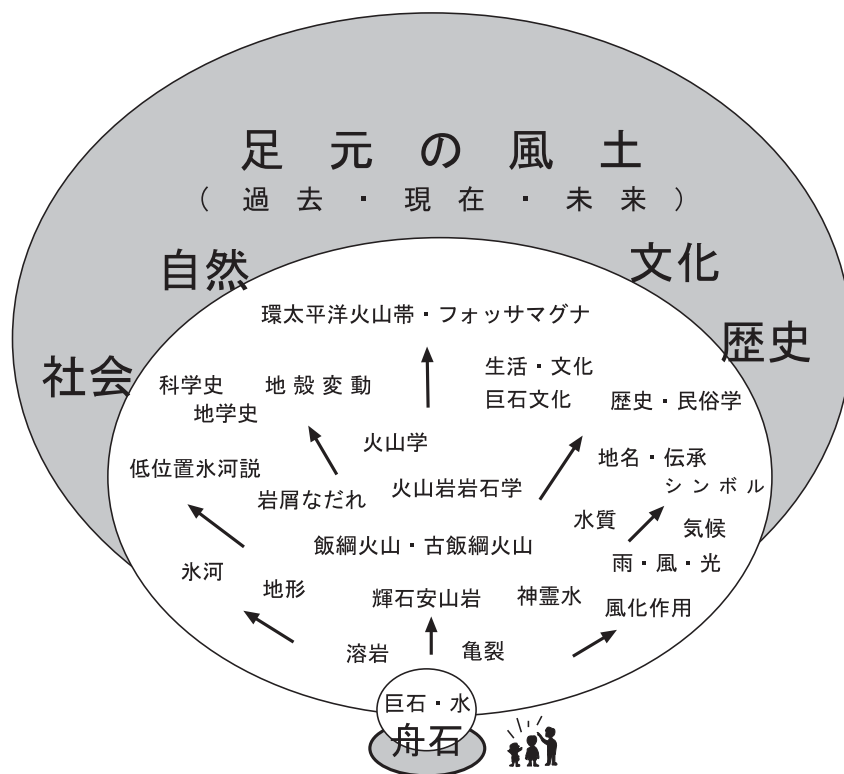


図7 舟石をみる視点と意味の広がり

も想像を容易に広げてゆくことができる。この想像力へのつよい刺激が、舟石がもつ価値なのであり、力であるともいえる。このような体験学習は、人々の地域理解をおのずから深めるだけでなく、石そのものが、人と風土が結び付くうえでの仲立ち役になるだろう。そして地域にとっての、舟石のような存在のもつ大きな意味は、おそらくここにあると考える。

なお、舟石のような存在を見いだすという行為そのものにも、今日的な意味があるだろう。たとえば、こういう発見が、地域に生きる人のアイデンティティの回復や、共同体意識の育成につながるのではないかという期待がある。少なくとも、この事例のように、身近な事象がもつ価値の再発見は、住む人の心に地域への愛着を育て、魅力のあるふるさとづくりへの足がかりとして役立つにちがいない。舟石はあくまでも一つの生きた事例である。次なる発見は、生き物かもしれないし、記憶や知恵のような無形のものかもしれない。いずれにしても、第二、第三の舟石のような存在は、まだまだあらゆる地域のいたるところに埋もれているはずである。

おわりに

舟石については、今後も各方面で研究が深められ、新たな知見が加えられてゆくであろう。地域の人々の石との関わりにも、新たな展開が期待される場所である。天然記念物への指定をきっかけに、村や地域の人たちによるなお一層の郷土環境の保護・保全と、賢明な活用が進展することを願う。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、牟礼村袖之山区役員の方々と情報を提供して下さった区民の皆さん、ならびに牟礼村文化財調査委員会の丸山義一委員長はじめ委員の方々には大変お世話になった。また、戸隠村地質化石館の田辺智隆学芸員には現地調査に同行していただき、助言や協力をいただいた。以上の方々に厚くお礼申し上げる。

注

- 1) 著者の富樫は舟石が文化財に指定される以前に、地元関係者による現地調査に同行し、地学的な

観察記録を村に報告した(2001年8月)。また、2002年11月に開かれた牟礼村文化財調査委員会のなかで、舟石と氷河論争との関わりについて報告した。著者の小山は牟礼村文化財調査委員会の事務局担当として委員会の運営に関わるとともに、地域博物館の学芸員の立場で文献や体験記録の調査・整理を行なった。したがって本稿における舟石の記載的な記述は基本的に著者自らの観察記録にもとづくものであるが、概ね委員会の報告とも共通する内容になっている。一方、考察の部分は、委員会から離れた立場で、著者が自由に構想し、論じたものである。

- 2) 低位置氷河説：第四紀洪積世の氷河がきわめて低い高度まで及んだとする説をいう。日本では小川琢治(1931, 1932)によって代表される説が大きな論争を巻き起こした。近年においても論じられることがあるが、少なくとも最終氷期の大規模な山麓氷河の存在は否定されている(小野1981)。
- 3) この伝説は、『むれむらの民話』(1994年、牟礼村公民館民話教室編集、牟礼村公民館発行)に収録されたものである。今回の袖之山地区での聞き取りでは知っている人はいなかった。
- 4) 同書では小川琢治博士の来訪を昭和17年6月頃とし、高岡小学校訓導藤沢土子二氏がその調査を援助し、さらにその後調査結果の論文が『地球』誌上に発表されたとある。しかし、昭和16年に小川博士は死去しており、藤沢訓導は昭和13~16年度までの在任(『牟礼村学校誌』)であり、『地球』誌上への論文発表は昭和7年にさかのぼる、というように矛盾点が多い。『高岡村のあゆみ』が刊行された昭和32年には、すでに小川博士の来訪がなかば伝説化していたのかもしれない。

文献

- 早津賢二(1985) 妙高火山群. 第一法規:344p.
早津賢二・清水智・板谷徹丸(1994) 妙高火山群の活動史—“多世代火山”—. 地学雑誌, 103(3): 207-220.

- 文化庁文化財保護部記念物課(1999)『歴史とふれあい現代に活かすために—記念物保護のしくみ—』.(パンフレット).
松木隆治(1975)「袖之山の舟石」『長野』81号:21-22.
宮沢今朝雄(1978) 巨石舟石. 分館報「そでのやま」No16, 袖之山分館.
牟礼村公民館民話教室編(1994)「むれむらの民話」.:40-43.
牟礼村公民館編(1989)「舟石—袖之山」.『公民館報むれ』187号:4.
牟礼村誌・学校誌編纂委員会編(1997)『牟礼村学校誌』.
中沢正幸(1997) 第1節地形と地質.「牟礼村誌」, 牟礼村誌・学校誌編纂委員会編:3-31.
岡山俊夫(1974) 日本の山地地形. 古今書院:246p.
小川琢治(1931) 中央日本の洪積世氷河作用に就いて. 地球, vol.16:321-332, 401-408, vol.17:1-8, 159-170.
小川琢治(1932)~(1933) 中央日本氷成堆積物の分布(一)~(四). 地球 vol.18:399-415, vol.19:1-9, 83-96, 163-172.
信濃毎日新聞社編(1992) 馬鍬石のこすり傷.「信濃すとーん記」, 信濃毎日新聞社:122.
小野有五(1981) 低位置氷河説. 地形学辞典編集委員会編「地形学辞典」, 二宮書店:423.
高野 薫(1990) 神秘的な石「舟石」調査から. 分館報「そでのやま」No28, 袖之山分館.
高岡村村誌編纂委員会編(1957) 第一節名勝.「高岡村のあゆみ」, 287-288.
富樫 均(2004) 名勝「舟石」. 地学団体研究会長野支部「長野の大地」編集委員会編「長野の大地見どころ100選」, ほおずき書籍:98-99.
富樫 均(2001) 四次元の自然と三次元の私たち. 長野県自然保護研究所紀要, 4, 別冊5:61-64.
富樫 均(2001) 牟礼村袖之山「舟石」について. 現地調査結果報告(牟礼村への提出資料).
矢野恒雄(1997) 第二章第四節集落のおこり(大字袖之山).「牟礼村誌」, 牟礼村誌・学校誌編纂委員会編:554-563.
矢野恒雄(2000) 茶臼山遺跡周辺の環境第1節地理的環境. 牟礼村教育委員会編「茶臼山遺跡」:2-4.

Values found in a huge float stone “Funaishi”

Hitoshi TOGASHI*, Takeo KOYAMA**

* *Nagano Nature Conservation Research Institute 2054-120 Kitago, Nagano 381-0075, Japan*

** *Mure History Museum 1188-1 Mure, Mure village 389 - 1211, Japan*

Abstract

Funaishi is a huge float stone in Mure village in central Japan. It was transported to the present position by a debris avalanche of the old Iizuna volcano, hundreds of thousands years ago.

The lithology is andesite and lava structure is clearly visible. At one time (some dozens of years ago) this stone was mistaken as glacial moraine deposit and considered to be a piece of evidence in the low altitude glaciation hypothesis. Mysterious sacred water collected in a deep crack in the center of the stone has been revered by local people. Thus Funaishi has various meanings to various fields e.g., geology, history of earth science, and folklore.

Therefore, through studies of Funaishi, we can understand not only natural history but also characteristics of nature and culture. Funaishi is an invaluable education teaching material, and existence of such an object in local surroundings may lead to rediscovery of values in familiar nature and culture.

Key words: Funaishil, natural monument, rediscovery of values, teaching material